

和光市の歴史
【中世～鎌倉・室町・安土桃山時代】

1192～1603

和光市域に鎌倉時代に関する史料はあまり残されていませんが、市内の妙典寺の開基である墨田五郎時光は鎌倉時代の一時期に新倉の領主であったといわれています。

室町時代の太田道灌が活躍した時代には、江戸と川越の中間地点として和光市域は位置づけられていたと考えられます。江戸時代に本格的に整備された川越街道はこのころから道として存在していたと推測されています。

戦国時代になると、和光市域も戦に巻き込まれることがありました。特に山内上杉氏と後北条氏が戦っていた頃は、両勢力の境界地点となっていましたようです。

中世に存在していたと伝えられている寺院として、不動院、地福寺、満願寺、金泉寺、妙典寺、東明寺があります。これらの寺院からは、中世特有の石像物である「板碑」などが確認されており、古くから人々がこの地に住んでいたことを証明しています。東明寺に保管されている元亀2年（1571）の鰐口は、現存する和光市域の最古の金工品といわれ、河村弥二郎という人物が東明寺に寄進したことが記されています。

東明寺の鰐口



江戸時代に書かれた地誌『新編武藏風土記稿』によれば、白子は後北条氏によって「新宿」が立てられ、六斎市と呼ばれる楽市が開かれていたといわれ、宿場的な性格があったと推測されています。昭和47年に白子で発見された11万枚に及ぶ大量の出土銭は中世に埋められた銭であると思われています。どのような目的で埋められたものか明らかになっていますが、白子の市場や宿と関係するのかもしれません。



昭和47年に白子から出土した銭の一部

